
県企画部と今年度の進め方について話合いがもたれる

三宅 隆

5月23日、今年度異動で新しく企画部長になられた山本善敬氏に面会しました。当 NPO からは、池谷理事長を始め、三宅、高橋、湯浅、諏訪の5名が参加しました。

この会議では、今年度、県が企画している「勉強会」の内容と、自然史博物館設立に向けた県の考え方を主に聞きました。

山本部長は、前花森企画部長からの、自然史博物館についての引継ぎについては、文章でもらってはいるが、まだ精読していないとの返答でした。どうするかについては、県の優先順位を精査しながら考えるとのこと、あまり積極的な意見はもらえませんでした。

当方としては、今までの長い期間の運動から、ある程度の施設は当然必要であるが、箱物批判や県の財政状況を考慮し、豪華な建物の博物館である必要はなく、ハード面よりソフト面（教育、研究）を充実した自然史博物館を考えるべきとの意見や、自然愛好研究者の基地となるような博物館、収蔵庫を充実し、金のかかる展示ではなく、学芸員が自分たちで考える手作りの博物館が必要などの意見をだしました。

「研究会」については、夏ごろまでに、計画

立案するとのことでしたが、研究会の内容については、どんな資料を収容すべきかをなどの検討を考えているようですが、我々としては、「静岡県にふさわしい自然史博物館とは！」など、今後の設立に繋がっていくような、内容にしてもらいたいし、一刻も早く学芸員を含めた準備室設立に繋がるような研究会にしてほしいとの要望をしてきました。

なかなか、こちらの思惑どおりに、事は進んでいきませんが、今年度は、資料保存事業はもちろんの事ですが、我々の活動を少しでも多くの県民に知ってもらうように、ミニ博物館を、静岡市科学館「る・く・る」と共催してみたり、近くの公民館でミニ博物館を計画したり、辻の事業所でも、何回か所蔵の資料の展示会の企画を計画しています。また、できるだけ自然観察会や他県の博物館見学会も増やしていこうと考えています。

ただ、当 NPO も資金的には苦しい財政状況ですので、会員の皆様には、会員の増加にご協力いただくと同時に、寄付金の可能性について情報を教えていただければ幸いです。

ミニ自然史博物館 開催のお知らせ

毎年行ってきましたミニ自然史博物館を今年も夏休みを利用して、実施することとしました。今年のミニ博は、より多くの方々に足を運んでいただくため、JR 静岡駅南口前の『静岡市科学館る・く・る』の場所をお借りして、共催で行うこととしました。この催しは、静岡県の豊かな自然を学んでいただき、県立自然史博物館の必要性を一般の方々に理解していただくために行うものです。

今年のミニ博のメインテーマは、『静岡県の絶滅のおそれがある動植物』で、絶滅危惧の動植物の写真・実物標本を展示する予定です。ま

た、毎年恒例の体験学習コーナーも行う予定です。

開催期間：平成 19 年 8 月 7 日（火）～12 日（日）
開催時刻：毎日午前 9 時 30 分～午後 5 時
会場：静岡市駿河区南町 14 番 25 号エスパティオ『静岡市科学館る・く・る』10F
※ 入場の際して、小中学生は無料ですが高校生以上は入館料 500 円が必要となります。

お問合せ先：静岡県自然学習資料保存事業室
TEL: 054-367-2111 担当 横山、三宅

総会記念講演

富士山と蝶

清 邦彦



講演中の清さん

「蝶を好きになったのはなぜですか?」

と聞かれることがあります。なぜ?と言われても、私が子どもの頃は、虫採りは男の子の遊びとして特別なことではありませんでした。なぜ好きになった、というよりも、なぜそれを大人になるまで続けられたのが、です。

小学校では、捕まえた虫に針を刺してラベルをつけて箱に並べれば、立派な理科の研究として認められていました。私は4年生で植物標本、5年で甲虫の標本、6年では蝶の鱗粉転写標本を出しました。

本格的に蝶の採集を始めたのは中学に入ってからでした。そろそろ昆虫採集などが恥ずかしくなる年齢でした。そこで科学部、生物部に入ることで昆虫採集を続けました。採集旅行に出かけ、文化祭に標本を展示し、記録を部誌に載せれば、それで立派な研究として認められていました。昆虫採集は理科教育の中で市民権があったのです。

今でも昆虫の好きな子ども、少年もいます。でもせつかくのその関心も、ゲームやコレクションの方向に行ってしまう、自然科学、自然史につながるような場がなくなってしまう。自然史博物館の役目のひとつはここにもあるかと思います。

私は富士山麓の富士宮市で育ちました。中学3年生の6月、富士山の西側山麓に広がる朝霧高原に初めての「遠征」をしました。当時の朝

霧高原は草原が遠くまで続いていて、アサマジミ、ギンイチモンジセセリなど何種類かの初めての蝶を採集して感動しました。

7月には登山バスに乗って、今度は富士山の中腹に行ってみました。森林の中を一日中歩き続け、ミヤマカラスアゲハやヒメキマダラヒカゲなどを採集しました。しかしこの日採集した蝶はすべて他の場所でも採集できる蝶ばかりで、苦勞して行くほどの所ではなかったと思いました。

高校1年の夏、静岡昆虫同好会の採集会で再び朝霧高原に行きました。静岡市から来た高校生たちが夢中でヒメシロチョウを追いかけていました。富士宮市では普通に見られるこの蝶が静岡市にはいないのだそうです。この日の調査の目的だったヒョウモンチョウやホシチャバネセセリも、みな富士山麓特有の草原性の蝶でした。

富士山は日本一高い山ですが、南アルプスには7種類もいる「高山蝶」が1種類もいません。それらの蝶は氷河時代に大陸から日本に広がったものです。やがて後氷期になり温暖化すると冷涼な高山 亜高山に逃げ込みましたが、富士山はこの頃も噴火活動を続けていたため侵入できませんでした。

富士山の中腹は森林地帯で、森林性の蝶が生息しています。しかし南アルプスの方が地形の複雑さもあつて森林も森林性の蝶も豊富な



朝霧高原から見た富士山



アサマシジミ



ヒョウモンチョウ

です。

では富士山を特徴づける蝶は何かと言いますと、朝霧高原などの火山性草原に生息する温帯の草原性の蝶なのです。火山の噴火によってできた草原も、やがては森林となってゆくでしょう。それを食い止めて草原を維持してきたのが放牧、採草、火入れといった人間のはたらきでした。

日本の温帯草原性蝶類は富士山に限らず火山山麓によく分布しています。しかしよく調べてゆくと、甲府盆地周辺などでは扇状地や河岸段丘など河川周辺とも結びついていました。伊豆半島の狩野川の河川敷にギンイチモンジセセリが生息していることが発見されたことも驚きでした。河川周辺は氾濫の程度によって荒原から樹林までの多様な環境がつけられます。堤防などのなかった時代、川は自由に流路を変え、平野部にはさまざまな段階の植生が広がっていたことでしょう。

私は、富士山の草原性蝶類のふるさとであるシベリアやモンゴルに行くようになりました。そこで見たのは、適度に放牧された家畜によって、蝶の生息に適した良質の草原が形成されていることでした。人々が生産活動を始める以前の世界は、野生の草食性哺乳類によってそのような草原が維持されてきたのではないかと考えるようになりました。

氷河時代、海面が低下して陸続きとなった大陸から移動してきた草原性蝶類は、冷涼で乾燥した気候、河川の氾濫による植生の更新や草食動物の摂食によって維持された草原に広く生息していました。後氷期になってそれらはたたらき、生息環境は失われてきましたが、それを

食い止めたのが人間による草原のカヤ場としての利用でした。

私は富士山には分布しないギフチョウやウスバシロチョウにも関心を持ってきました。ギフチョウの幼虫はカンアオイ類という林床植物を食草とします。カンアオイは林の中がまだ明るい春の間に光を受けて育つという落葉樹林に適応した植物です。暖帯に落葉樹林があるのは、人々が薪炭林として落葉樹林を維持してきたからです。

1978年、富士山には分布しないとされてきたウスバシロチョウが富士山から発見され、1995年には富士山麓全域に広まってしまいました。それは富士山の環境が変わってしまったことを意味していました。草原がカヤ場としての利用価値がなくなり、牧草地やレジャー施設に変えられてゆく一方で、採草が行われずに放置されるようにもなりました。ナンテンハギなど草丈の低い植物を食草としてきたアサマシジミなどから姿を消してきています。

富士山麓の草原は人為作用によってできた草原、二次的な植生として低く評価されかねませんが、手を加えないのが自然保護とは限りません。伝統的な農林業による自然への介入は、火山噴火、河川の氾濫、野生草食獣などによる自然のはたらきの代償行為です。氷河時代といった過去の自然環境を人為的に現在まで維持してきたものです。

富士山麓の草原の荒廃は、ギフチョウの生息する暖帯落葉樹林を含む里山の荒廃とも共通するもので、牛馬や薪や炭を使わなくなった人々の暮らしの変化がその背景にあります。

引佐でカタクリとギフチョウの観察会

足立 京子



カタクリの群生する山道を行く

4月1日(日)静岡駅南口、7時30分、3台の車で出発。天竜二俣で1人合流。参加人数は16名でした。

天候も晴れ、寒くもなく暑くもなく、とても心地よい観察会でした。

ギフチョウは見る事が出来るか判らないような事を聞いていましたが、歩き始めてまもなく姿を見せてくれた。その後、ずっと歩く道沿いで見られました。ふわふわ飛ぶのが♂で、重そうに飛ぶのが♀だそうです。カタクリは、よく写真集で見るような群生ではないけれど、歩いている間中ちよこちよこ姿を見せてくれました。群生のカタクリも美しいけれど、山道をずっと見守るように咲いてくれているささやかなカタクリも山道をわくわくさせてくれてうれしかった。

カタクリもギフチョウも、歩いている間中ずっと見られるなんてものすごくラッキーで、スペシャルな観察会だったのでないでしょうか？

一般の方も、何グループか会いました。ギフチョウとカタクリの写真を撮りたくて粘ってる方にも会いました。地元では、有名なのでしょうかと思ったのですが、地元から参加の野澤利治さんは初めて来たといっていました。

杉野さんが資料を作ってきてくださいまし



カタクリとギフチョウのツーショット写真撮影

た。カタクリはユリ科の多年草で20年生きるそうです(花をつけるのは15年~20年)アリがカタクリの黄褐色の種子の端にあるエライオソームという附属体に惹かれて、巣穴に運び種子散布が行われているそうです。歩いている途中で、蛇紋岩地帯なので貧栄養の土地と何度か耳にしました。貧栄養だから、背の高い植物がはびこらずギフチョウが食すカンアオイが消滅することなく、ギフチョウも生き続けることができるのだろう。カタクリも少々色は薄いのですが、ささやかさが強調されているようにでした。その貧栄養の土地の中でひと際目立ったのが、大きなホオノキです。ホオノキは貧栄養でもあんなに大きくなるのでしょうか?と疑問が残りました。

引佐で見られた生物は(見たもの順)

植物 ホオノキ・カタクリ・リョウブ・イヌツゲ・タチツボスミレ・メギ アカマツ・アラカシ・ヤブニツケイ・モミジイチゴ・スズカアザミ・ドウダンツツジ・クロモジ・ヒメカンズゲ・サンショウ・シブカワシロギク・ヒメカンアオイ・シブカワツツジ アケビ・ノイバラ・シマジタムラソウ・ネザサ・マンサク・イヌツゲ・フモトスミレ・キキョウ・ホウチャクソウ・ホソバシユロソウ・サルトリイバラ・ヤマガシユウ・ソヨゴ(モチノキの仲間)・

ガンピ・シュンラン・ヤマトイモ・ナガバノ
 タチツボスミレ・コウヤボウキ・ヒメハギ・
 シキミ・イヌガヤ・シブカフニンジン・ツチ
 グリの仲間
 昆虫 コツバメ・ヒオドシチョウ・ギフチョ
 ウ・モンシロチョウ・キチョウ・ミヤマセセ
 リ
 鳥 ヒヨドリ・トビ・ホオジロ・ウグイス・
 ハシボソカラス・メジロ・アオゲラ・アオゲ
 ラ・シジュウカラ・ヤマガラ・イツツバメ・
 ホオジロ・キセキレイ・(ホオジロの巣)
 哺乳類 イタチ
 両生は虫類 カナヘビ
 その他 ハチの巣

植物 ニオイタチツボスミレ・スギナ・フキ・
 ハナニラ・アカミタンポポ・セイヨウタンポ
 ポ・カラスノエンドウ・ショウジョウバカマ・
 ニリンソウ・ヒメオドリコソウ・カキドオシ・
 オオイヌノフグリ・キランソウ
 昆虫 ヒオドシチョウ・モンシロチョウ・モン
 キチョウ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・ヒメ
 ウラナミジヤノメ・ヒゲナガカフトビケラ
 鳥 イツツバメ・セグロセキレイ・ツバメ・
 ホオジロ・キセキレイ
 魚類 フナ・カワムツ・ニジマス
 両生は虫類 イシガメ・トカゲ

参加したみなさん勉強熱心でした。私のメモ
 に抜けているものがあつたらお知らせくださ
 い。

時間があつたので、帰りにくまの里に寄り
 ました。ここで見られた生物は(見たもの順)

日本学術会議が声明 「博物館の危機をのりこえるために」を公表

国及び地方自治体の財政赤字拡大に端を発する平成 15 年地方自治法の一部改正や公共サー
 ビス改革法により、平成 18 年度にはすでに 29%以上の国公立の博物館がいわゆる指定管理者制度
 を導入している。このような博物館を取り巻く状況に鑑み、日本学術会議は、学術・芸術・文化
 の蓄積・普及装置としての国公立の博物館が、その機能充実を目的とした改革ではなく、財政お
 よび経済効率を優先する改革に影響されて、社会的役割と機能を十分に発揮できない状況に陥る
 可能性があることを憂慮して、平成 19 年(2007 年)5 月 24 日に声明「博物館の危機をのりこえ
 るために」を公表した。

博物館とは歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集、保管、調査研究、展示
 し、また教育的配慮をもって市民・公衆の教養、調査研究、レクリエーション等に資するために
 必要な事業を行う機関である。公立の博物館では、近年の指定管理者制度の導入によって短期的
 には「より良質かつ低廉な」博物館サービスが試行されている一方で、長期的にみた事業運営上
 の弊害や潜在的危険性が浮上している。また、指定管理者への短期間の業務委託は、博物館の基
 盤業務である長期的展望にもとづく資料の収集、保管、調査をおろそかにする傾向を招き、その
 基盤業務を担う学芸員の確保と人材育成が危ぶまれる状況を招いている。

博物館に託された役割と機能は、高い学術・芸術的価値と時間的価値を集積した実物資料の保
 存、継承、活用にある。博物館は、広く国民に対し、資料をできる限り適切な環境で公開し、そ
 の価値をわかりやすく示し、これらを確実に次世代に伝えることが期待されている。このため博
 物館には将来を見据えた中・長期的計画が不可欠であるが、同時に時代の変化に慎重かつ的確に
 対応する柔軟性も不可欠である。

公立博物館が、指定管理者制度の適用を受けるのであれば、博物館の役割と機能に加えて作業
 の質の維持及び作業の継続性が担保される必要がある。

報告全文は、日本学術会議ホームページの以下の URL で御覧いただけます。
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-s6.pdf>

静岡県の地質 (2)

大崩海岸の枕状溶岩

柴 正博



小浜海岸の枕状溶岩



浜当目海岸の枕状溶岩

枕の間をうめる赤く見える部分は
後からのマグマの活動でできた岩石

今から約 1,500 万年前、静岡市と焼津市の間にある高草山から大崩海岸にかけての地域は深い海の底で、そこでは海底火山の活発な活動がありました。このとき海底で噴火した溶岩は大崩海岸などで見られます。この溶岩は主に玄武岩で、これにはアルカリ成分（ナトリウムとカリウム）が多くふくまれることから、アルカリ玄武岩と呼ばれます。アルカリ玄武岩は、大陸や本州の日本海側では普通に見られますが、太平洋側で分布しているところは珍しく、またこの岩石にはガスのぬけた小さな穴に沸石やメノウなどの鉱物も見られます。

大崩海岸の崖で見られる溶岩は、直径 50cm ~ 1m の丸い形の岩石がつみ重なったように見えます。このような枕をつみ重ねた溶岩を枕状溶岩と呼びます。玄武岩のように粘りけの少ない流れやすい溶岩が海底などに噴出して海水と接すると、急に冷えて溶岩が表面積を小さくして丸くちぢみ、そのひとつの塊が枕や俵のような形になります。さらに、海水と接する溶岩の表面は急冷して、一番外側にガラスの層ができます。

焼津市の浜当目海岸で見られる枕状溶岩の岩石は、四角い斑点のような結晶（斑晶）が目立ちます。また、枕と枕の間にはそれをうめる岩石があり、この岩石には斑晶が目立ちません。この岩石も玄武岩ですが、斑晶のめだつ玄武岩とは成分が違って、斑晶が目立つ玄武岩の枕状溶岩が流れたあとに別のマグマが地下から上昇してきて、その枕と枕との間を岩脈となって通ったことがわかります。

浜当目海岸の虚空蔵山の山頂やその北側の小浜では、この岩脈の岩石と同じ斑晶が目立たない玄武岩の枕状溶岩が広く分布しています。このことから、この岩石をつくったマグマがすでにあつた海底火山の下から溢れるように湧き出してきて、海底で次々と噴出して海底に枕状溶岩をつくりあげていったと考えられます。小浜海岸の崖では、その激しい海底噴火の様子を、1,500 万年を超えた現在でも想像できます。

静岡県の鳥 (4)

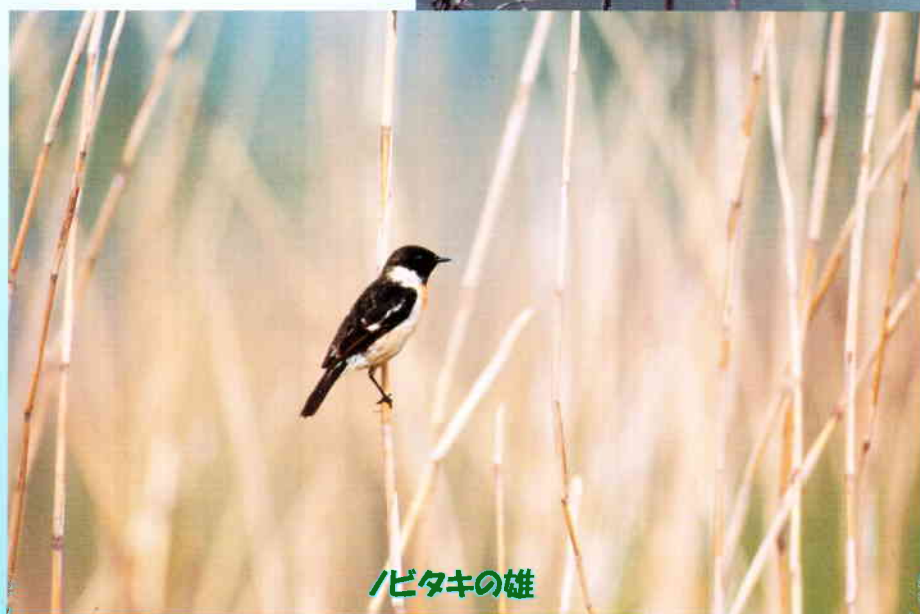
ノビタキ

文：三宅 隆

写真：小池正明



ノビタキの雌



ノビタキの雄

黒いマスクに翼の白い斑、「フィーフィーチョ、チョチヨリリ」と低木の上で鳴きながら、低い草丈の草原を飛び回るスズメより少し小さな小鳥。それがノビタキです。夏鳥として、日本に渡来し、秋には南の国に渡り冬を越す渡り鳥です。北海道では平地の草原でも繁殖しますが、本州では主に高原と言われる場所で繁殖します。静岡県内では富士山麓の、朝霧高原や東富士演習場などに生息し、秋の渡りの時期には、平地でも見られます。

朝霧高原は、県内唯一と言ってもいいくらいのノビタキの重要な繁殖地です。数十年前は草原のいたるところで観察され、高原の探鳥会の主役として、たくさん見られたものでした。しかし時代と共に、平原の開発、植林による森林化、野焼きの中止による植層の変化などで、ここで見られるノビタキは激減しています。朝霧の草原は、昔から人が新しい芽をだすために野焼きをし、焼却に強いカシワの木が残る特殊な草原です。つまりある程度人の管理の入った草原で、そこに適応したのがノビタキなのです。

1昨年、朝霧道の駅周辺で、バードウォッチングをした時には、それでも数番は見られたのですが、今回はついに見つけることができませんでした。他の数箇所も行って見ましたが、姿はありませんでした。さらに、高原性の鳥と言われる、アカモズ、コヨシキリ、ホオアカなども減少していますし、大空をすごい音を響かせて飛び回る、カミナリシギとも言われるオオジシギなどは、私はもう何年もその姿を見ていません。

人も生活をしなければなりません。しかしあの多くの朝霧高原を通り過ぎる多くの車やバイクの騒音を目にしていると、人はどこまで自然を破壊していくのだろうと考えざるを得ません。

人が故郷を懐かしむように、ノビタキにも帰ってくる場所をいつまでも用意してあげたらと願っています。

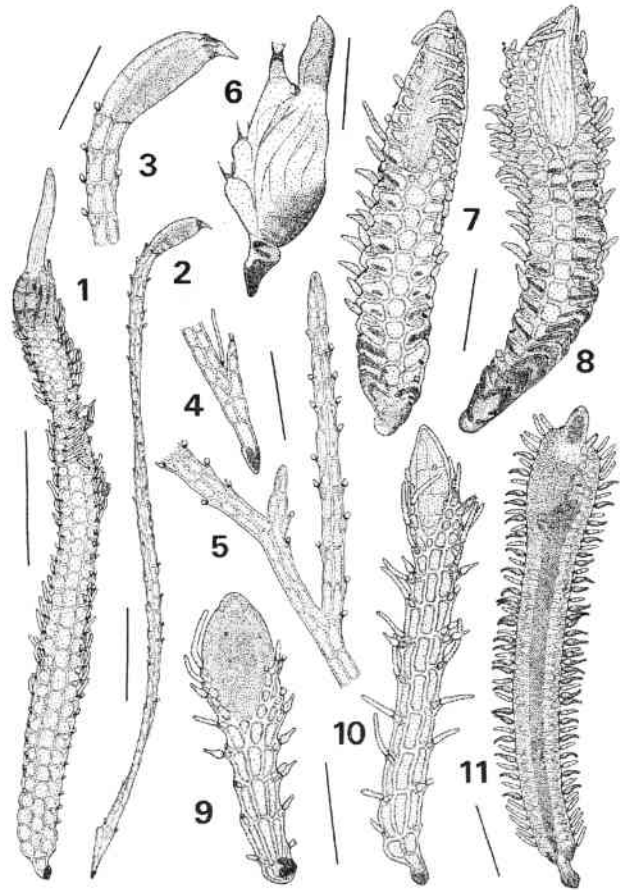
ラブルベニア菌について

杉山 恵一

静岡県立自然史博物館の標本収蔵所に、近く私のラブルベニア菌のコレクションを受け入れていただくことになったが、一体それは何だというのが一般の人々の感想であろう。一般のひとびとだけでなく、菌類の研究者であってもこの名前を聞いてうなずく向きは多くないだろう。それほど特殊な菌類である。全世界でこの菌の専門家といえるのはせいぜい数十人に近いということでもその特殊性が知られるというものである。昆虫寄生菌というと、あるひとは「冬虫夏草」を思い起こすことであろう。これは、さまざまな昆虫の内部で菌糸を発達させ、やがてその宿主の命を奪うと、その死骸から小さなキノコを生じさせるといったものである。

ラブルベニア菌は、人間が魚と近いといった程度には冬虫夏草に近いと言える分類学上の位置にある。大きな違いは、非常に小さな顕微鏡的存在であること、菌糸を宿主の体内に伸ばすことなく、したがって宿主の命を脅かすことはないということである。昆虫の体表に付着してごくわずかの栄養を得ているのである。このことから、ラブルベニア菌は冬虫夏草よりはるかに進化を遂げたグループであることが分かる。宿主を殺してしまうということは、いわば金の卵を産む鶏を殺すことに似て、けっして寄生者にとって有利なことではない。宿主と良好な関係を築いてこそ高度な寄生者であるといえるのである。さらにこの菌がより進化を遂げたものであるということの証拠として、その種数がおびただしい数に上ること、さらにそれらのすべてが、特定の昆虫にのみ寄生するという、いわゆる寄主特異性を示すということである。ご承知のように、昆虫は生物の中でもっとも多様化したもので、その種数は全生物の種の9割以上を占めるものであるが、その昆虫の進化の系統にそって分化してきたのがこのラブルベニア菌であると考えられるのである。

しかし、この菌類の何よりの特徴は、その形態の奇妙な美しさとその限りない多様さであ



ラブルベニア菌 リッキア菌の各種
スケールは100 ミクロン

1. リッキア コエロストマリス, 2-5. リッキア ヌタンス, 6. リッキア ミヌティシマ, 7-8. リッキア ヨシイ, 9-10. リッキア ポルネオエンシス, 11. リッキア エウモルフィ

った。その一端を図によって示したが、それらにある種芸術的感興をそそられるのは決して私だけではないであろう。もしこれらの菌体がこの図のように大きなものであったとしたら、ちょっとした飾りになりそうである。しかし実際の大きさは、300~500 ミクロン、つまり1ミリの半分以下に過ぎない。当然肉眼では、その存在すら定かではない。

このように多様な形態を持った菌類であるが、もちろん共通の特徴によって分類上のまとまりを保っているのである。まずその菌体は一方向に沿って細まり、その末端に黒化した足と

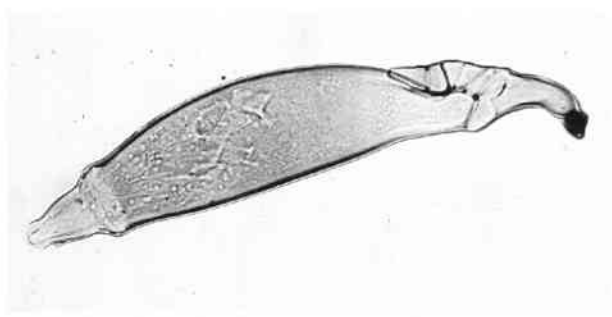
呼ばれる器官を持っている。この器官によって昆虫の外骨格に付着し、微量の栄養を吸収しているのである。この足の上に発達した菌体の主要部分を托と呼ぶのであるが、この托の形の多様性が、この菌群の多様な形態の主因をなしているといつてよい。図はそのごく一部を示すものである。

この菌のライフサイクルは、胞子が宿主の体の表面に付着し、細胞分裂を始めるところからスタートする。このとき菌体の一端の宿主との接触部分に、先に述べた足が形成される。この器官の特殊な作用によって、宿主の固い外骨格の中から微量の栄養が吸収され、菌体の成長が可能となるのである。この栄養はきわめてわずかなものであるらしく、宿主の生命はおろか健康状態にもほとんど影響を及ぼさない。

ラブルベニア菌の探索は、多くの昆虫を双眼顕微鏡下で検査することから始められる。寄生率が非常に低いので、何千匹という昆虫に当たることになる。昆虫は死んでいるもので差し支えない。アルコール漬けのものでも乾燥したものでもよい。

発見した菌体は、柄つき針の先で足の部分を突いて昆虫の体表からはがし、特殊なマウント液を用いて永久プレパラートにする。観察は顕微鏡下で、300～1000倍の倍率で行う。

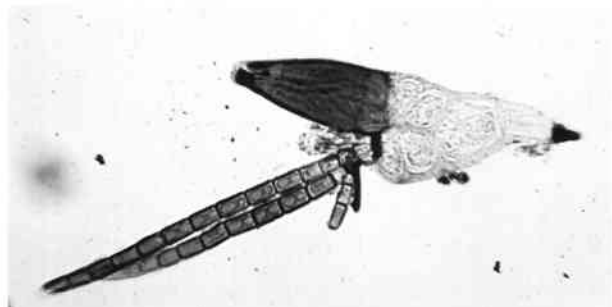
私は大学院から静岡大学時代の約35年間に、4000匹あまりの昆虫から70種ほどの新種を含むこの菌を発見し、それらを9000枚ほどのプレパラートとして保存した。それらをこのたび



ボリアンドロミセス コンプトソマリス



ゴキブリの触角に生じたヘルポミセスの一種毛の間に3個体が見える



ランブルベニア クリスタータ

静岡県立自然誌博物館に寄贈することになったのである。

図書紹介

超・美術館革命

—金沢21世紀美術館の挑戦—

蓑 豊著 角川書店 ¥686+税



市立美術館は1年間の入館者が5～6万人と言われるが、金沢21世紀美術館は一般になじみの薄い現代美術を扱っているにもかかわらず、開館わずか2年余りで300万以上もの人が訪れた。中心市街地の空洞化に対して、美術館が町おこしの核となった「アイデアと情熱」を館長が熱く語っている。ファンド・レージング経営者である館長は、行政は立派な建物を造ればいいという箱物行政だし、美術館を運営する人たちは外に眼が向いていないために人に見に来てもらおうという発想がない。さらに美術館は暗いというイメージが強いのは、照明が暗いからではなく、学芸員が暗いからである。と痛烈に日本の美術館を批判する。「美術館」を「博物館」に読み替えて、博物館教育論として読んでみると面白い。(柴 正博)

自然観察会報告 朝霧高原の自然

三宅 隆



野鳥観察



高橋先生と昆虫採集する子どもたち

5月27日、朝霧高原道の駅周辺で自然観察会を実施しました。当日の参加者は、飛び入り参加も含めて何と51名。いままでで最高の参加者数です。この理由としては、会員の大原さんが主宰されている作文教室の生徒とご家族が大勢参加したからです。JR静岡駅南口からの参加者は11名。残りは直接「朝霧高原道の駅」集合です。道の駅は、多くのバイクで混雑していました。天気はよく暑いくらいでしたが、富士山は、黄砂のせいか霞んで見えました。

始めに、今日の講師（昆虫 高橋、諏訪、清。植物 杉野、湯浅。野鳥 三宅）の紹介をし、大勢のため、3班（昆虫班、野鳥班、植物班）に分けて出発しました。子供たちの殆どは、捕虫網を持って昆虫班へ参加。午前中道の駅の道路の反対側を散策しました。

野鳥グループは、随分と歩き回りましたが、なかなかじっくり野鳥を見ることが出来ず、カッコウ、オオヨシキリ、コヨシキリなどの声がするだけです。県内では朝霧でしか見られない、今回の主役のノビタキは結局確認されませんでした。アカモズも個体数は激減しているようで、アカモズの姿を求めて多くのカメラマンが集まっていました。結局見たり聞いたりした野鳥の種類数は20種類あまり。なんとなく物足りない探鳥会でした。

昆虫グループは、虫取りに夢中。でもあまり

チョウの数も少なく、ウスバシロチョウやベニシジミなど。しかしツマキチョウには皆感激していました。

植物グループは、やはりどちらかというと年配の方の参加が多く、ゆっくりと歩きながら、観察していました。丁度植物の端境期のため、あまり多くの植物は見られなかったようですが、フジサンシキウツギ、カナウツギなどの特有の植物や、レンゲツツジがきれいに咲いていました。しかし、牧草地化されているため、昔の草原の面影は、どんどん薄れているようです。

午後は、昼食の後、別な場所での観察会をしました。小さな湿地で、モリアオガエルの卵塊を見つけたり、昆虫採集をしたりと、子供たちはそれなりに楽しんでいるようでした。

それにしても、朝霧高原の環境は、ずいぶんと変わってきています。カシワの木が点在する平原は減っており、檜の植林や農耕地が増え、高原性の野鳥や昆虫の住処がどんどんなくなっているようでした。野焼きによる植生の維持もなくなり、放置されたススキが目立ちます。特に、これら人手の入った管理された草原に依存してきたチョウの減少は顕著なようで、自然の環境保護の難しさを痛感しました。

今回多くの方々の参加で、賑やかな観察会ができました。これからもよりよい観察会を実施していきたいと思っています。